

【テーマ】

「AIを活用し、事務職員の業務の質を向上する」

【主催】次世代情報システム検討分科会

活動報告

日 時：2025年8月6日（水） 14:30 -17:00

場 所：神戸国際会館セミナーハウス+オンライン配信（Webex）（ハイブリッド開催）

出席者：94名

1. 研究内容

次世代情報システム検討分科会が、神戸国際会館セミナーハウス（神戸市中央区）の会場とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。

生成AIに関しては、近年個人の業務利用が広がる一方で、大学における組織的な導入は検討段階と思われます。今回は、神戸学院大学様から導入事例をご紹介いただき、富士通株式会社様からは、企業におけるAI活用ユースケースと具体的な活用効果を解説いただきました。

2. スケジュール

14:30 分科会開始

○開会挨拶

○ご講演（45分）

「ゼロから始めたAI活用 ～我々は如何にしてAIプラットフォームに辿り着いたか～」

神戸学院大学 図書館・情報支援センター 事務部長 西 久美子 様

○質疑応答（10分）

○休憩（10分）

○ご紹介（20分）

「富士通における社内AI実践」

富士通株式会社 Corporate Digital本部 シニアマネージャー

浅間 康太郎 様

○グループディスカッション（40分）

○各グループより全体共有（20分）

17:00 ○閉会挨拶

「AIを活用し、事務職員の業務の質を向上する」

2025年8月6日（水）、次世代情報システム検討分科会が、神戸国際会館セミナーハウス（神戸市中央区）の会場とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。

生成AIに関しては、近年個人の業務利用が広がる一方で、大学における組織的な導入は検討段階と思われます。今回は、神戸学院大学様から導入事例をご紹介いただき、富士通株式会社様からは、企業におけるAI活用ユースケースと具体的な活用効果を解説いただきました。

摂南大学の玉瀬氏（次世代情報システム検討分科会運営委員長）の司会で進行し、同氏が「今年度の当分科会は、AIを活用した教育・業務の質向上を考えてまいります。今回は113名の皆様にご参加いただき、本テーマへの関心の高さを実感しています」と挨拶し、講演に移りました。

■ご講演：

「ゼロから始めたAI活用

～我々は如何にしてAIプラットフォームに辿り着いたか～」

神戸学院大学 図書館・情報支援センター 事務部長 西 久美子 氏より

○コストとセキュリティを追求し、AIプラットフォームを内製化

神戸学院大学は10学部・8研究科を擁する総合大学で、学生約1万1000人、職員約200名が在籍しています。情報支援センターには専任職員が5名おり、外部委託スタッフと協力し、学内ネットワーク管理やPC管理支援等を担当しています。

コロナ禍で学生・教員向けはペーパーレス化が進んだものの、事務内部は依然として紙が主流でした。この状況を改善するため、2024年度に若手職員8名と情報支援センターのメンバーで「事務業務DX推進プロジェクト」が発足しました。しかし、本業が忙しかったこと等からプロジェクトはなかなか進みませんでした。当初はRPA製品の導入検証やAIチャットボット、Copilot等を試しましたが、コストや技術面の課題で導入を見送りました。

一方、情報支援センターでは要望のあった議事録作成でGoogle AI StudioやWhisperを検証しましたが、セキュリティの懸念や容量制限により実用化には至りませんでした。その頃知ったのが「Dify（ディフィ）」です。Difyはオープンソースのノーコード・ローコード型AI開発プラットフォームで、最新モデルとのAPI連携、RAG構築、マルチモーダル対応等、柔軟性とコスト面に優れており内製化に適していました。有志数名がローカルの環境で検証用PCを用いてオンプレ環境を構築し、議事録作成アプリ等を試作したところ、簡単に作成でき、実用性も高いことが分かりました。コストパフォーマンスを考慮しても、サードパーティサービスよりも内製化の方が優れていると判断し、Difyの活用に舵を切ることになりました。

全学に展開するには、予算、サーバー、人材全てが不足していましたが、それでも情報支援センターの職員の好奇心、継続的な業務改革と業務委託の一元化による自由になる時間の獲得、新しいことへの挑戦を後押しする部署風土、そして少しの予算と生成AIを武器に、内製化を進めました。Dify基盤環境は中古PCにできる限りメモリを積んで構築し、公開用ポータルサイトを無料のSaaSサービスを活用しAI駆動型で開発。特にClaude 3.5 Sonnetのアップデートにより開発が劇的に進展し、未経験のスタッフでしたが短期間でサイトを立ち上げることができました。

2024年11月には、公開文書作成支援、議事録作成、なんでも相談の3つのアプリを搭載した検証サイトを公開しました。12月にはGeminiのAPIがマルチモーダルに対応し、長い会議の音声データを分割せずに取り込める議事録アプリが完成。これが好評を博し、利用者が増加しました。

2025年1月には、不安定だったDify基盤のOSを、WindowsからLinuxに変更することで安定稼働に成功し、2月にはポータルサイト「AIプラットフォーム」が事務職員全員に公開されました。公開から半年、当初5つだったアプリは現在では20を超え、各部署の要望に応じたアプリも増えています。

では、なぜAIプラットフォームを内製化したのかをご説明します。

なぜ「自前のAIプラットフォーム」が必要だったのか？

セキュリティ担保

「野良AI」による情報漏洩リスクを防止。オンプレミス設置、ログ管理、API利用(LLMの学習に非利用)で安全性を確保。

コスト効率

安価なAPI従量課金制で、利用実態に即した支払いを実現でき、全学展開してもスケールしやすい。

迅速性・柔軟性

最新AIモデルを即座に利用可能。各部署の細かいニーズに応じた内製アプリを柔軟に開発・提供できる。

DX文化の醸成

職員がAIを手軽に体験し、業務改善を考えるきっかけに。「自分でも作りたい」という自発的な動きも出現。

1. セキュリティの担保

無償版のAIツール利用による情報漏洩リスクを回避するため、オンプレミスで環境を構築しAPI利用とすることで、アップロードされた情報がLLMの学習に使われないようにしました。

2. コスト効率

有料のAIライセンスを全職員に提供する場合、年間数百万円の費用がかかりますが、API利用であればLLMモデルごとの従量課金制のため利用者数に依存せず、アプリの用途ごとにモデルを使い分けることで料金を格段に安く抑えられます。

3. 迅速性・柔軟性

市販のサービスでは最新モデルへの対応等が遅れる等のデメリットがありますが、内製であれば、職員の要望に迅速に対応することができます。

4. DX文化の醸成

安全な環境を提供することで、AI利用に不安を感じていた職員の活用を促し、業務改善を自ら推進できるようなDX文化を組織に根付かせることが期待されています。

Difyの主な特徴として、ソフト自体が無償でユーザー数に関わらず全学展開しやすいこと、様々なAIモデルへ切り替えられること、RAGを作成できること、そして学内サーバーに設置すればセキュリティを確保できる点が挙げられます。デメリットはサーバー構築やDocker運用等のインフラ知識が必要なこと、頻繁なアップグレードへの対応、追加開発等が必要なことです。

現在は、RAGを活用した文書作成支援アプリが最も利用者が多く、ほかに汎用チャットボットのなんでも相談用アプリ、議事録作成支援アプリ、Excel VBA作成支援アプリ、部署業務に特化したRAG等が活用されています。アプリの活用事例として、データ解析や業務用マクロの作成、AI-OCRを活用した文書管理データ作成などがあります。

AIアプリの利用率は増加傾向にあり、2024年6月には月間約1000回、7月には約1200回の利用がありました。API利用料も増加しましたが、使用するAIモデルを見直しコストを抑えることに成功しています。限られた予算の中、自らの手で構築したこのプラットフォームは、現在では事務職員の考える負担を軽減し、業務改革の強力な支援ツールとなっています。

運用開始して半年、運用の煩雑さ、RAG精度、利用者側のスキルや意識の格差など課題もいろいろ見えてきました。それらに対応しつつ、今後は、MCP、A2A等のプロトコル連携による自律型AIエージェントへの進化も視野に入れ、AIを活用した業務フローの自動化やCLIを活用した新たなアプリ開発を目指しています。技術の進化とともに、アジャイルに開発を重ね、組織内にDX文化を根付かせていきたいと考えています。

質疑応答では、職員の利用率、Microsoft Copilot等との併用について、複数のLLMを採用した理由等について質問がありました。

■ご紹介：

「富士通における社内AI実践」

富士通株式会社Corporate Digital本部 シニアマネージャー 浅間 康太郎氏より

○AI活用で月に数十万時間相当の業務量を削減。大学でのユースケースもご紹介

富士通では、社内でのAI活用に戦略的に取り組んでおり、その利用状況を詳細に分析しています。最新のデータでは月間6〜7万人のアクティブユーザーがおり、1日あたりの総利用回数は約40万回に上ります。

社内で利用されているAIサービスは多岐にわたり、Microsoft 365 CopilotやAzure OpenAI、Google Vertex AI (Gemini) 等、複数のサービスを使い分けています。特徴的なのは、UIを備えたサービスアプリとしての利用と、APIを直接利用する活用方法がほぼ1対1の割合である点です。これは、社内に多くのエンジニアがいるため、各自がAPIを利用して既存システムにAIを組み込むケースが多いことを示しています。

こうした社内AI活用により、残業時間の削減効果もデータで確認されています。AI活用に対する定量的な評価は難しいのですが、当社では所属部署ごとの平均残業時間とAIの利用回数・利用率のデータを組み合わせて富士通のAIエンジン「Koduchi」を使って分析しています。この算出方法で、昨年度は約140万時間、本年度は第1四半期だけで約80万時間相当の業務量が削減されたとみられます。

社内におけるAI活用のフェーズには5つあると考えています。①Trialでまずは使ってみる。そして②Deploymentで効果を実感しユースケースができて始めます。③Essentializationでは、AIが業務に不可欠な存在となります。さらに④Strategic Integrationの段階になると企業・組織戦略としてAI活用が前提となっていく、最後の⑤Further Futureでは、企業の枠を超え、AIと共存する未知の世界です。私は、富士通は③または④の状態だと捉えています。

<以降は富士通Japan 高原氏 より>

富士通の社内実践例から、大学で活用できそうなAIのユースケースを6つ紹介します。

1. AIエージェントの活用

関連論文の検索・要約、論文のアウトライン生成等による研究論文支援。専攻やスキルに基づいた企業・職種の推奨や履歴書の添削によるキャリア支援等。

2. 生成AIチャットボット

履修登録、施設予約、受験生等からの問い合わせに対応する24時間365日稼働のチャットボット。

3. アンケート分析

学生の満足度調査や授業評価アンケートを自動分析。

4. 対話やインタビュー等の音声情報分析

音声情報を分析して、面談の要点や学生の課題、アドバイスの内容を自動で要約。入試の面接音声に適用して、評価の均質化・標準化を支援。

5. パイプラインや経営レポート作成

学生のデータを参照して、ポートフォリオや進路、キャリアパスのレコメンドを生成。

6. 広報発信の自動化

高校生、在学生、卒業生等ターゲット層に合わせたニュースやイベント情報を自動で発信。

最後に、富士通が提案している「学生カルテAI」をご紹介します。これは、学生の学習履歴や課外活動データから、客観的な観点に基づいた適性職種やキャリア形成に関するアドバイスを生成し、教職員が行う所見登録をAIで支援する取り組みです。

このように、AIと人間それぞれの得意なことを見極めてAIを活用することが重要です。

■グループディスカッション：

3グループに分かれてグループディスカッションを行いました。各グループからの発表を紹介します。

Aグループ

事務職員向けの生成AI活用と、ガイドラインの整備について議論しました。神戸学院大学の事例のようなAIエージェントの推進はまだこれからという大学が多く、情報部門が主導して統制をとることが重要であると指摘されました。また、教員向けの具体的なアプローチが不足しており、積極的にAIに取り組んでいる事例を共有するコミュニティの重要性も話題に上りました。

Bグループ

多くの大学で、一部の職員のみが生成AIを使っており全学的な活用には至っていない状況です。業務利用に関するガイドラインを整備していく必要がありますが、富士通の社内ガイドラインを参考にできるのでは、というアドバイスもありました。また、生成AI活用のフェーズを、効率化、教育分野への活用、大学経営全体への活用と3段階に分けて考えるべきだという話も出ました。

Cグループ

A、Bグループと同様の議論がありました。ライセンス購入の費用対効果が課題となっており、財務系の部署にAIを使ってもらい、その利点を理解してもらうというアイデアも出ました。ガイドラインについては、「機密情報はAIに入れない」という方針は共通しているものの、何が機密情報かのレベル付けが不明確である点が課題として挙げられました。

■まとめ：

分科会の結びに、大阪工業大学の井上氏(次世代情報システム検討分科会幹事)より挨拶がありました。「生成AIについて多くの議論が交わされ、今後の活用のヒントが得られました。今後もCS研として、最新的话题を継続的に提供していきたいと思います」と述べ閉会となりました。

4. 参加校 [36校59名] ・参加企業[5社34名] ・参加総数[93名]

愛知学院大学 [1]	実践女子大学 [1]	東海大学 [1]	エフサステクノロジーズ株式会社 [2]
横浜市立大学 [1]	女子栄養大学 [1]	東京工科大学 [1]	チエル株式会社 [1]
(学)常翔学園 [4]	城西大学 [1]	東京大学 [1]	東京コンピュータサービス株式会社 [1]
関西国際大学 [2]	上智大学 [1]	東京都市大学 [1]	有限会社ハーティサービス [1]
関西大学 [1]	神戸学院大学 [4]	東京理科大学 [1]	富士通Japan株式会社 [29]
京都産業大学 [3]	清泉女子大学 [2]	東洋学園大学 [1]	
共立女子大学 [1]	専修大学 [1]	東洋大学 [1]	
九州大学 [1]	大阪経済大学 [3]	名城大学 [1]	
慶応技術大学 [4]	大阪公立大学 [1]	明治大学 [1]	
甲南大学 [1]	大東文化大学 [2]	立教大学 [4]	
国土館大学 [1]	中京大学 [1]	流通科学大学 [1]	
名古屋大学 [3]	津田塾大学 [1]	麗澤大学 [1]	
産業能率大学 [1]	帝京大学 [1]		

5. 所感（次世代情報システム検討分科会運営委員会）

今回の分科会は、神戸国際会館セミナーハウスにて対面とオンラインでのハイブリッド形式で開催され、94名が参加し、生成AI活用への関心の高さがうかがえました。

昨年度は「生成AIを知る・体験する」ことがテーマでしたが、今年度は「生成AIを具体的に活用していく」ことを主題としており、その意味でも神戸学院大学様の内製化事例は非常に参考となりました。

神戸学院大学の西様から発表があり、Difyを活用した議事録作成や業務支援アプリの開発・展開の過程が具体的に示され、限られた予算や人材の中、現場主導でDX文化を醸成し、業務効率化を実現している点は大変印象的であり、ひょっとしたら自分たちでもできるかもと思わせてもらえるような興味深い内容でした。

また、富士通様からは社内AI活用の実績や、それをふまえた大学でのユースケースが紹介され、AI導入の段階的な進化やガイドライン整備の重要性が示されました。

グループディスカッションでは、全学的なAI活用の課題や他大学との情報交換の意義が共有され、今後の発展に向けた多くのヒントが得られた有意義な会となりました。

最後に、ご多忙の中ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。皆様の積極的なご意見や情報共有が、今後の分科会活動のさらなる発展につながることを期待しております。

【 分 科 会 の 様 子 】



【事務局より】

次頁以降に開催後アンケート結果（抜粋版）を記載しています。

開催後のアンケート結果詳細版や当日プレゼン資料ご覧になりたい方は、「[CS研・IS研情報交換サイト](#)」に掲載しておりますのでそちらをご覧ください。また、今回の分科会開催に際し事前アンケートを行っています。事前アンケート結果につきましても「[CS研・IS研情報交換サイト](#)」に掲載しております。

◆「CS研・IS研情報交換サイト」について

CS研・IS研の会員向けに情報・資料をご提供し、会員の皆様で情報交換をする会員専用のサイトです。

（サイトのご利用をご希望の方は、利用アカウント申し込みサイトにてお申込みください。）

情報交換サイトURL：

<https://csis.ufinity.jp/shared>

※利用アカウント申し込みサイトURL：<https://seminar.jp.fujitsu.com/public/seminar/view/102857>

【連絡先】

私立大学キャンパスシステム研究会 事務局

〒 212-0014 神奈川県川崎市幸区大宮町1-5 JR川崎タワー

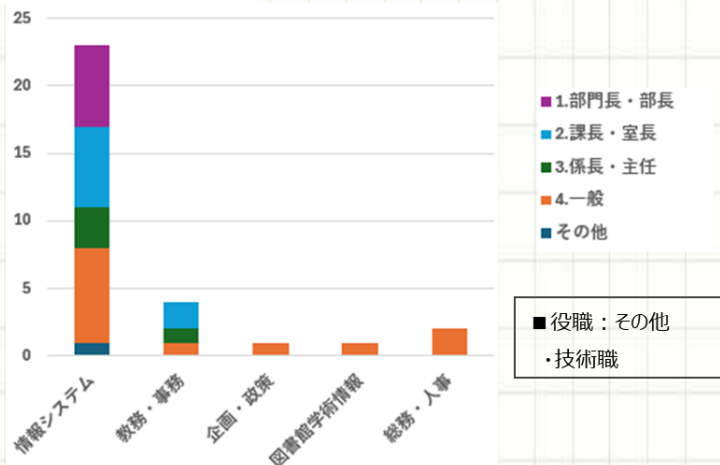
富士通Japan株式会社 ビジネス変革室内

E-mail：contact-csisken@cs.jp.fujitsu.com

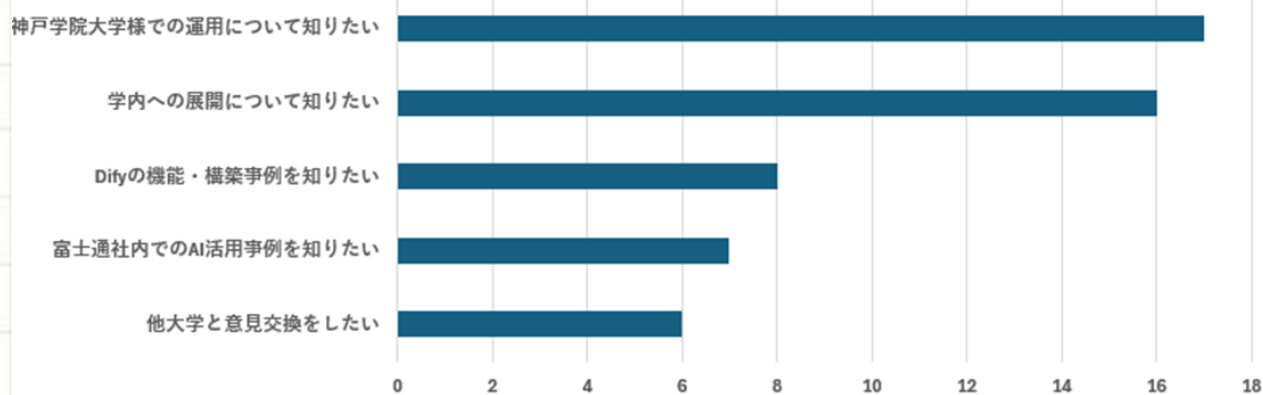
開催後アンケート結果【回答数／対象者数：32／59（大学関係者のみ）】

■ 担当業務と役職について

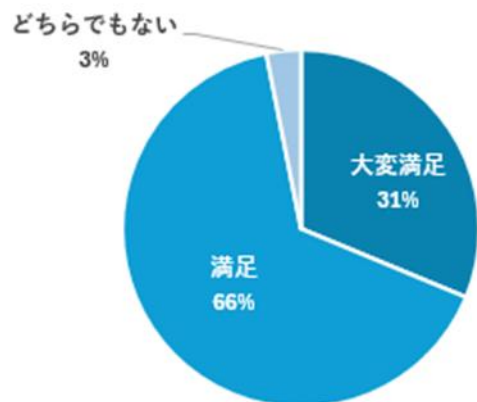
■ 担当業務と役職



■ 参加した目的について



■ 本日の分科会の全体満足度について



満足以上 : 97%
やや不満以下 : 0%

■全体満足度の評価理由について（一部省略・抜粋）

【講演内容（神戸学院大学の先進事例）への評価】

- 神戸学院の事例を聞けたから
- 神戸学院大学様の先端事例をお聞きすることができ、本学の取り組みの遅れを痛感した
- AI活用を検討するという同様の立場でありながら、既に成果を出されている事例を具体的にお伺いすることができたため。セルフホスト版 Difyをバックエンドにして、フロントはvibe codingで内製する、というアプローチは非常に稀有で面白かったです。
- これまでの過程を知ることができ、Difyの有用性を知ることができました
- 具体的な取り組みの事例に触れることができ、大変参考になりました。
- 構築の流れをイメージできる事例をうかがえました。
- オンプレでのAI環境構築を構築する上で有用な情報を得ることができた。
- 本学内でもなかなか生成AIの業務活用ができていなかった折、他大学様の先進的な事例を知ることができました。Webでの検索などでは限界がありますので、実際に業務に携わっている方からご説明いただき、大変ためになりました。
- 神戸学院大学様内でのLLM構築、それに至るまでの検討内容などの情報を得ることができたため。
- ボトムアップの良い例として、非常にモチベーションが上がった。
- わかりやすく、また同意もしやすいご説明だったので大変参考になりました。
- 神戸学院大学様のプラットフォーム化への運用について知れとても勉強になりました。

【他大学との交流・情報交換への評価】

- 普段あまり交流出来ない関西の参加他大学の状況（現場の声）を知ることができて、有意義な時間を持てた。
- 他大学の優良事例や他大学内での生成AIに対する温度感を知ることができたため。
- 初めての参加でしたが、他大学のAI利用の現状や情報交換ができ、良い刺激をもらうことができました。
- 他大学の生成AI導入状況を把握でき、本学の状況が客観的によくわかりました。
- ディスカッションで他大学と情報交換できた点

【全般的な感想】

- 貴重なお話をいただきありがとうございます。
- とても良かった

■今後、CS研で実施してほしいイベントやテーマについて（一部省略・抜粋）

- 教育や研究でのAI利用
- chatGPT、Copilotなど生成AIの比較検証
- AIを取り巻く環境は変化や進化が激しいので、引き続きAI関係のテーマを希望します。
- 生成AIを使ったアプリ開発のハッカソンイベント
- エージェントの事例交換
- IRに関するテーマ。実際に具体的な成果が得られた事例を現在探しております。
- 各大学の施設見学などは、なかなか、パイプが無いと難しいと思いますので、実施いただけると参考になるかと存じます。
- 引き続き、他大学の先端事例をご紹介いただけると嬉しいです。

■CS研についてのご意見・ご要望について（一部省略・抜粋）

- とても良かったです。
- テーマ設定、内容、ともにいつも有意義です。ありがとうございます。
- 意見交換・情報交換だけでなく、研修会等を通じたスキル交換が催されるのであれば参加してみたいと感じた。
- 会場内でWi-Fiを使えるようにして欲しい。
- 当日資料の共有が簡単になされるとありがたいです。
- 神戸学院大学様の講演資料を共有ください。